

小田実全集〔評論 第23巻〕

でもくらていあ (上)

「人間は殺されてはならない」・「人間の国」「人間の文明」の構築へ



講談社

小田実全集

Makoto Oda

目次

はじめに

なぜ、この本を書くか・小さな娘の問い

10 6

I 「戦後」とは何か・その指標、基本

1 「三極構造」崩壊後の「一極構造」の世界

30

2 「戦後」とは何か・その指標、基本

41

3 アメリカ合州国の「戦後」

59

4 「戦後」の指標としての「平和主義」

75

5 「パシフィズム平和主義」・その「体现」、原理

101

6 「良心的軍事・戦争拒否国家」日本

116

II 「第三世界」の「告発」と「革命」

1 「第三世界」の「告発」と「革命」

146

2 「内部収奪」と「外部収奪」の歴史、現在

162

3 「パイ拡大」と「文革」

4 「OPEC」の失敗、「非同盟」の崩壊

5 「西洋」に対して来た歴史

III ゆたかさがもたらしたことを考える

1 ゆたかさ、さまざまな「中流」の形成

2 日本の「戦後」・経済発展の土台にあったもの

3 「法人資本主義の壁」のなかの繁栄

IV さまざまな異者・さまざま排除

1 「経済化」「政治化」された倫理と論理

2 「異者」を排除するさまざまな動き

3 人間の問題としての「民族」

4 「サラダ社会」と「暴力社会」

でもくらていあ(上)

——「人間は殺されてはならない」・「人間の国」「人間の文明」の構築へ——

はじめに

私は、この「はじめに」につづく次章の「なぜ、この本を書くか・小さな娘の問い」のなかで、「なぜ、この本を書くか」について書いています。元来は、その次章が「はじめに」でありました。そこから始めて、このかなり大部の本はでき上る——というのが、私が最初考えていたこの本の構想でした。次章にある通り、何年もまえからこの本を書こう、いや、書くべきだと私は考えて来ていました。そして、何度も書き始めては中断し、そのさまざまに書きあぐねた努力のあとで本格的に書き出したのは、一九九二年、次章にあるように、「PKO（国連平和活動）協力法が国会を通過して、私の言う「PKO前の日本」とは根本的にちがった位置に立つ「PKO後の日本」が出現した、まさにそのさなかのことでした。「PKO」協力法は、具体的には自衛隊の海外派兵の道を開いたものですが、原理的にも現実の事態においても、もつとふり幅の大きい、それこそ戦後日本のありようの根幹にかかわる問題としてありました。これはえらいことになるぞ、と私は事態を認識し、危惧し、この本を書こうという私の気持はいちだんと緊張がたかまって、いや、書くべきだ、にまでなりました。そして、書き出した。

書き出したのは日本でのことでしたが、そのあと、メルボルン大学の「客員研究員」となった私はメルボルンに「単身赴任」して書き、さらには、九二年の十月からニューヨーク州立大学ストーニ

インブルック校（略称「SUNY」）の「客員教授」になったあとは、ロング・アイランドの「草深い」田舎町（文字通りその感のある田舎町でした、その私と家族が住んでいた小さな町は）の建てられて百七十年だという木造家屋で一年書き、その家族とともにくらし一年のあと、今度はニューヨークのマンハッタンのどまんなかのこれも建つて百十年の古びた集合住宅の一室でまた「単身赴任」の生活をやりながら一年かかって書き、そのあと九四年夏に帰国してから兵庫県の西宮の集合住宅にふたたび居住して書き、仕上げの段階にようやくさしかかったところで九五年一月十七日が来て、早朝五時四十六分、くら闇のなかで私は家族とともに、今は「阪神・淡路大震災」という名で呼ばれるようになった大地震に遭遇しました。

くわしいことはすでにべつの本（「被災の思想 難死の思想」朝日新聞社）のなかに書いたのでここでは書きません。要は、まず、私がその大地震との遭遇の体験のなかで文字通り死にかかったことです。地震の起こったのは午前五時四十六分という時刻の、真冬のことなのでまっくら闇のなかでのことでしたが、朝早い時刻に起きて仕事をする習慣の私はその時刻の少しまえに眼を覚まして、これから仕事をしようかとベッドのなかで考えているあいだに、部屋全体が大きく揺れ出し、暗黒のなかで万物落下、大震災が始まった。その万物落下のなかに部屋のなかの巨大な書棚が倒れて来ることもあって、その落下をベッドのそばのコピー機が防いでくれて私は助かったのですが、おかげで仕上げにとりかかっていたこの本の原稿、万物落下、崩壊のなかに散逸、かなりな部分が姿を消すという事態にもなっていました。その復元に時間がかかっているうちに、この大震災そのもの——それはまさに「人災」ということが最初からあてはまるものとしてあったのですが、その「人災」を正面きって考え、

書くべきだとの思いを持ち始めました。ちょうどそのとき、ある出版社（朝日新聞社）が地震についての本を書かないかという話をもつて来たのでその頼みを引き受けて書き出したのですが、その作業が意外に長くかかってしまいました。それが今（九六年はじめ）ようやく終って、ふたたび懸案のこの本にもう一度取りかかることにしました。

ひとりの書き手が考え、書くことです。この本で書いて来たこともそこに反映しているのは当然のことですが、やはり、この本で書くこうとして来たことはそれ自体として書きつづけるべきことだと大震災の体験を通じて、また、その大震災にかかわつての本を書く努力のなかで、私は強く感じとりました。

さつきも少し触れたことですが、私は大震災のなかでわるくすれば死んでいたかも知れない体験をもち、私の住む集合住宅も手ひどい被害を受けたのですが（神戸市内の仕事部屋のひとつは全壊しました。近くの姉の住居にもなっていた書庫は半壊で、九六年はじめ、いまだに修復の見込みはついていません）、とにかく倒壊は免がれ、いつとき三十万人の人が滞在を余儀なくされた避難所へも行くかずにすみました。しかし、その体験は、やはり、私の思想、ものの考え方、感じ方、そして、生き方のありように「震災以前」「震災以後」と区別していいような大きな切れ目を刻印したように思えます。このそれ以前から長く書きつづけて来た本にも、その刻印のあとは残されているようです。しかし、幸いにして、この震災によつて、それまで私が考えて来ていたことがすべて無であつたことが示された、マチガイ、マヤカシであつたことが判つたというものでは事態はありませんでした。ひとつうれしかつたのは、おおよそそのところで私が考えて来たこと、書いて来たことがまちがいでなかつ

た、震災という人間の大惨事の試練に耐えることができた——そのことでした。ただ、震災は私の思考をさらに徹底させた——とは言えることでないかと思えます。

次章の「なぜ、この本を書くか・小さな娘の問い」に登場して来る「小さな娘」も今は小学校四年生ですが、小学校三年生の後半に震災を体験したことになります。彼女は彼女なりに震災を体験し、彼女なりに、私の言う「被災の思想」をかたちづくったにちがいありませんが（思想は本ではない。それぞれ生ま身の人間が考えることだというのが私の持論です。「世界思想全集」というようなものは、あれはまさしく本で、思想ではない。「世界思想全集」を読んで、たとえば「マルクス」について自分で考え、自まえの思考をかたちづくる——それが「思想」です）、彼女は今も、「アッパ、今何を考えているの」と訊きます。そして、私は今も「おまえが大きくなったときに世界はどうなっているか、考えているのだ」と答えます。かつてこの問答を親娘のあいだでしたときには、震災は娘はもちろん父親の視界のなかにもなかったかと思えます。しかし、今は二人の念頭にそれはまぎれもなく存在しています。

なぜ、この本を書くか・小さな娘の問い

1

今、いったい、世界はどうなっているのか、そして、どうなっていくのか、と考えている人は多いと思います。もちろん、その思いは、日本はどうなっているのか、どうなっていくのか、の思いにつながります。ここ数年、世界にはほんとうにいろんなことがありました。ゴルバチョフ氏の旧ソビエトにおける「ペレストロイカ」が大きな引き金となって「社会主義世界」が崩壊し始め、それが「ベルリンの壁」の崩壊によって決定的になって、長年つづいて来た「東西」対決の冷戦構造が消滅、これで世界がようやく世界戦争の脅威から免がれた未来へ向かうと見えたところに世界の誰もが予期しなかった「湾岸戦争」が起こり、先ゆき、まったく不透明のことになってしまった。そして、これもまた戦後このかた、そして、自衛隊ができてからでも日本人のたいていが予期しなかった自衛隊の「海外派兵」も行なわれれば、もうひとつ、永久不変のものかに見えた自民党政権の消滅も起ったかと思うと、そのあとウヨ曲折あつて、今度は社会党が自民党といっしょになって政権をつくる。そして、これによって社会党は長年の「平和主義」の立場を決定的にかなぐり捨てました。これは政党としての社会党の原理的、現実的消滅を意味しています。

あげて行けばかぎりありませんが、大きくまとめ上げて言つて、多くの人が考えていることは、下手をすればたいへんなことになる、ということではないでしょうか。いや、もう少しくわしく言うと、何か未来に明るいものが見えて来ているような気もするが、ただならぬけはいもある。世界全体についても、日本についてもそうです。そして、もうひとつ言うと、かつての日本とちがつて今日本は世界のなかでいやおうなしに大きな位置を占めている。それは日本が下手に動けば、世界全体がその動きでそれこそ下手に動くことになって、たいへんな事態になることだ。この本は私のそのせつばつまつた気持あつての本です。この本を書くことにしたのは何年かまえのことですが、準備をして実際に書き出してからも、世界も日本も大きく変わつて来ています。変わるなかで、何がたしかなものであるかを見さだめることに時間もかかつて、今、ようやくこの本がこのかたちのものになりました。

もちろん、こう書いたからと言つて、私に世界のさまと動きがすべての確に見えているというわけではありません。また、予言者めいたことをここで言うつもりありません。ただ、私には私なりに体験もあれば、知識もそれなりにある。それに基いて、この世界について、また日本について、ここ数年考えて来たことをまとめて書いて来た——これがこの本ですが、私が期待するのは、この本を読みながら読者がそれぞれに考えて下さることです。もともと本を書くのは、読者のそうしたいわば著者との共同作業を期待してのことですが、ことにこの本についてはそうです。この本を土台にして、人びとが考え、おたがい考えていることを述べあつて、議論の輪ができ、その議論の輪がさらに大きな考えを形成する。私は今そうしたことを期待しているのですが、まさに、今、時代はそれを必要としているように見えます。

私がこの本を書く動機には、私の小さな娘がかかわっています。今年（九四年）で小学校三年生です。それからまさに小さな娘ですが、彼女がまだ幼稚園にいたころ、ある日あるとき、娘を見ながら考えにふけつているときに、彼女に「アッパ、今何を考えているの」と訊かれました。娘の母親は（在日）朝鮮人で、それで父親のことを朝鮮流に「アッパ」と呼ぶのですが、それはまったく不意打ちの質問でありました。小さな子供の直感というものは鋭いものだ。と今さらながら考えるのですが、そのときの私のとつきの答は、「おまえが大きくなったときに世界はどうなっているか、考えていたのだ」でした。まさにその通りのことだったので、次の質問はさらに私に不意打ちをくわせていました。「で、どうなっているの、世界は」が彼女の次の質問でしたが、この質問に、私は「さあ、どうなっているのか」と口ごもりました。そして、口ごもったあと、これがかつてなら、かつてと言っても、そのときからほんの三、四年まえのことですが、私は口ごもらないで、それなりに何か答えられたはずだと考え出していました。

ひところ、市民運動の集会などに出ると、赤ん坊を抱きかかえた若いお母さんがたが、真剣な面持ちで、「いったい、これから世界はどうなるのでしょうか。核戦争で破滅するのではないですか。この子の未来が心配です」と訊ねかかって来たものでした。私にそうした若いお母さんがたの思いつめたような表情が忘れられないのは、彼女たちの表情の痛切さとともに、たしかに世界が核戦争による破壊の危機をもっていたからだけではありません、そのときの危機が容易に誰の眼にも見えるもので

あったからです。そして、その私の思いは次の私の思いにつづきます。危機は、今も変わらずある。しかし、それは、今、かつてのように誰の眼にもあきらかなものとして見えては来ていない。もちろん、ケンメイな私の眼にだけ明瞭にそれがすべて見えて来ているということではありません。そうだとしたら、私は私の小さな娘の質問にぶざまに口ごもらないで、それなりに答えられたはずです。

かつてなら、いや、ほんの数年まえなら、世界の事態は、破滅の危機をふくめて、それなりに見えて来ていました。ということは、危機を回避するそれなりの手だてを考え出すこともできたということです。あとで述べて行くことですが、世界はそのころ「東西」両陣営対決の冷戦構造を主軸にして動いていました。もうひとつの戦後の世界構造である、富める「北」の世界（のなかには、「東」の社会主義陣営のなかの旧ソビエトや東ヨーロッパ諸国なども事実上入っていました）が貧しい「南」の世界を支配するという、圧倒的不均衡、不平等な発展に基く「南北」構造は存在して来ていたのですが、動きを形成する主軸は、あくまで「東西」の対決構造でした。話を大きくまとめ上げて言えば、「東西」はそれぞれはじめは相手を悪魔としてこの世界からの抹殺をはかりました。しかし、どちらもが途方もない量の核兵器をもってしまった以上これではおたがい共倒れになる——とあって、覇権争いをつづけながらとにかく共存する道をさぐる。これが、「緊張緩和^{デタント}」であつたわけですが、最近までの世界史の展開は、結局、「緊張」と「緊張緩和」を基軸にして動いて来ました。ときには、何かのきっかけで、「東西」間の「緊張」はたかまる。それが、あわや、というところまで行つたところで、「東西」両陣営ともに——と言つたところで、主役はあくまでアメリカ合衆国と旧ソビエトという両陣営の親玉であつたわけですが、その親玉どうしが、これでは世界は破滅する、自分たちも破滅すると考

え出して、「緊張緩和」に乗り出す。そのうちまたぞろ「緊張」、そして、あわや、と言うところで「緊張緩和」。このくり返しが、大きく言って、戦後の世界のさまでなかったかと思えます。ここでひとつことわっておきたいのは、「緊張緩和」をすべてそうした親玉たちの理性にもとづかせるつもりは私にはないことです。「東西」対決の戦後構造のなかで「緊張緩和」を生まれさせ、根づかせ、そしてつづけさせて来たのは、そこで主軸となったのは、世界各国の平和をねがう市民たちであり、市民たちがかたちづくった有形無形さまざまな平和への動きであつたことを、私はここでまず激しく主張しておきます。

ともあれ、かつては危機が誰の眼にも見えて来ているとともに、それに対する手だても、それなりに考えられたことは、今述べて来たこととお判りになっていただけたと思います。しかし、今はどうでしょうか。旧ソビエトの「ペレストロイカ」に始まつたここ数年来の世界の激動は、「東西」対決の冷戦構造を根本的に崩壊させてしまった。これはほんとうにすばらしいことであつたのですが、それにしては、あの「ベルリンの壁」が崩れ去つたときの感激を、今、世界はすでに失なつて来ているように見えます。あれは、たしかに世界の誰もが明るい未来を世界の行く手に見た一瞬でありました。自分たちの住む世界がもうこれで核戦争による破壊から永遠に手を切つた、戦争のない世界になつて行けると多くの人がそのとき考えたにちがいないのですが、それが、今、どうしてそうした未来を原理において先取りしたような日本国憲法——「平和憲法」をまつこうからないがしろにするかたちで、自衛隊の「海外派兵」が「PKO」協力法の名の下に実際に行なわれたりするのか。それどころか、今やかつては金科玉条であつたはずの「平和憲法」が時代おくれのものととして「改憲」が当然である

かのような事態に社会全体がなつて来たりするのか。ベルリンの「壁」の崩壊、冷戦構造の解体がかつて考えられなかったことであるように、こうした事態はその「ベルリンの壁」崩壊にさいして私たち日本人の大多数が考えもしなかったことであると思います。事態の変化は想像を絶しています。いや、思考も越えています。冷戦構造が解消したのになぜ自衛隊が公然と軍隊として動き始め、海外にまで出て行くことになるのか。「平和憲法」の正当性が世界大にひろがる規模で認知されたと思えた一時期のあとで、なぜ、かくもないがしろにされるまでになったか。私が、小さな娘の質問に思わず口ごもってしまった理由もお判りかと思います。ひとつ言えることは、これまでの手慣れた思考ではとらえられないところに世界は来ていることです。

それにしても、私がこのごろ気がついていることがひとつあつて、それは、市民運動の集会などで、かつてのように赤ん坊を抱いた若いお母さんがたが思いつめた表情で、「この子の未来はどうなるんでしょうか」と訊ねかかつて来る、そうした光景がめっきり見られなくなっていることです。今こそ私にはその質問が痛切になつて来ているのですが、そういう光景がなくなつたのは、みんなに先が見えているからでしょうか。それとも、このまま行けば大丈夫、なんとかなると考えているからでしょうか。いや、そう言えば、そうした光景の消失うんぬんを言うよりは、若い女性たちそのものの姿が集会に見えなくなつて来ている。そのことのほうがかんじんかも知れません。

3

自衛隊の「海外派兵」を実現させた「PKO」協力が国会で議決されて、成立した（九二年）六

月十五日の夜、私は国会議事堂のまえに立っていました。その日は奇しくも一九六〇年の「安保闘争」で女子学生がひとり殺された日ですが（そして、その「安保闘争」の対象となった「安保」——「日米安全保障条約」は、冷戦構造の解体のあと世界がこれだけ変ったのに、その変化のなかで「P K O」協力法さえ成立しているというのに、「安保」は変わらず残っている。このことの意味はきわめて重大です。しかし、「P K O」協力法をめぐる国会の内外の議論のなかで、「安保」のことは、「安保」と「P K O」協力法の関係のことはあまり問題にされていないようでした）、私が深夜近い時刻の議事堂のまえでしきりに考えていたのは「大正」時代のことでした（元号を使うのはいやなのですが、理解の便宜上使っておきます）。

あの時代は「大正デモクラシー」ということばが示すように、まえの「明治」時代にくらべて「リベラル」とまでは言えないにしても何かしらおだやかな時代でした。とにもかくにも、いかついきめしい、息づまるような「明治」時代が、そのありようのきわめつけのような「朝鮮併合」（という名の朝鮮の「植民地化」です）と「大逆事件」の二つで終って、ようやく国民にも息をつける時代が来た。それが大きくまとめあげて言つての「大正」時代だったのですが、それはまた、第一次大戦後の「軍縮」の時代でもありました。世界的にひろがった「軍縮」の動きのなかで、日本でも軍人がサーベルを下げて歩くのがかっこうがわるくなつて「平服」で歩くようになったと言われていたようなことが起こっていました。反戦平和の時代がついに来たとは見えなかったようですが、それでも実際に「軍縮」が行なわれてもいれば、「軍縮」の空気が社会にかなりたち込めてもいたとは言えるでしょう。国民の頭上にいつも存在して来た天皇について言つても、「大正」天皇は、周知のように知能に

障害のあった方で、それだけでも「明治」天皇のように威厳とこわさに満ちた天皇ではありませんでした。そこへもつて来て「大正デモクラシー」ということばで象徴される時代の空気です。あれやこれやあつて、志賀直哉が「明治」天皇の死後に「殉死」のかたちで自刃した乃木將軍のことをバカな男がバカなことをしたと日記に書きつけた——そういうことにもなっていたらどうと思います。

そうした「大正」時代に、いったい何人の日本人があと十年ほどで日本は中国にむかつて侵略戦争を開始するとか、軍部が政治にのさばり出て来るとか、天皇がいやが上にも「現人神」^{あらひとがみ}となつて国民の上に君臨するようになるとか、そうした事態を考えていたのか、と私は今さらのように考えます。その比較的「リベラル」でおだやかな時代に、のちの世に自由の弾圧で猛威をふるうことになる「治安維持法」が「大正デモクラシー」の象徴のような「普選法」と引きかえのようにして成立しています。それには濫用を防ぐような附帯決議がついていましたが、もちろん、そうした附帯決議などは世の中のさまが變つて行くなかでなんの力ももたなかった。のちの歴史の動きを知っている私たちにすぐそんなふうに言えるのですが、そのころ、いったい、ほんとうに何人の人間が「治安維持法」の行く手のこと、時代の行く手のことを見する眼をもっていたでしょうか。「治安維持法」を成立させた議員さんたちは、もちろん、そうした眼はもっていなかったにちがいありません。そして、のちの世、いったいあなたがたは何をやつてのけてくれたのだ、責任をとれと人びとがつかけて来たところで、もう彼らは政界にはいなかった。いや、この世界からも立ち去っていたかも知れません。

私はその一九九二年六月十五日の夜、国会議事堂のまえに立ちながら、今ここにでき上りつつあるのは、あえて言えば、「PKO後の日本」だと考えていました。この「PKO後の日本」は、それま

での「PKO前の日本」と根本的にちがった日本としてある——というのが私の実感でしたが、その実感は、それからの日本の政治、社会の変化を見ていて、決してまちがっていないと思います。永久不変のものと見えた自民党政権の崩壊という事態の大きな変化が起りましたが、しかし、うち見たところ、その大きな変化も「PKO後の日本」というより根本的な変化のなかに吸い込まれてしまっているかのように見えます。早い話、自民党政権の崩壊のあと出現した連立政権のなかで自衛隊の「海外派兵」がさらにおおっぴらに取り沙汰され、自衛隊は連立政権内部の社会党出身の閣僚によつてさえ「合憲」の存在として認知されたことから始まつて、今度は自民党、さきがけ党と連立政権を形成した社会党は、自衛隊「合憲」を明言するまでに至ります。そして、社会全体の空気も大新聞、テレビジョンの論調をふくめて、同じ方向にむかつて大きく動き出している。「改憲」はもちろんその動きのなかであり得ることでしょうし、よしんば「改憲」はなくても、このまま「自衛隊＝合憲」の延長線上ですべては可能であるようです。論より証拠、かつての「護憲」勢力の社会党をふくめた連立政権の出現後、軍事予算は伸び率は少し減つたものの減るところが増額されつづいて来ていますし、ここ何年もやつて来なかつた米軍と協力しての大演習も北海道で大規模に行なわれて来ました。旧ソビエトという北方の脅威が消えたあと、なぜまた北海道であるのか、という気がしますが、そうした疑問を呈する人たちの数は世界第三位——いや、もうロシアを抜いて、今や世界第二位の軍事予算に対して反対の声をあげる人たちの数とともに、今、日本の社会のなかで急速に減つて来ているように見えます。そして、社会党、自民党、さきがけ党の連立政権の登場後は、自衛隊の「海外派兵」はまさにおおっぴらに行なわれる——これが今「PKO後の日本」に起こつて来ている現象ですが、この

果てに何があるのか、未来は予断を許しません。

4

私がここで思い出すのは、「ベルリンの壁」が一九八九年十一月に崩壊したあと四月ほど経って開かれたある国際的なシンポジウムでのイギリスの国際ジャーナリストの発言です。シンポジウムが開かれた場所がどこであるかは話の本筋に関係ありませんが、いちおう書いておきますとオーストラリアのアデレードでの「作家週間」^{ライターズウィーク}という催しのなかのことです。現在の国際情勢を論じるというシンポジウムで私のような作家もふくめて、いろんな国のジャーナリスト、学者が集まって来ていましたが、なかなかうがったことを言うなと思ったのは、そのイギリスのジャーナリストの発言でした。彼は何年もまえの「サイゴン解放」にしろ「光州事件」にしろ、あるいは、「天安門事件」、「ベルリンの壁」崩壊にしろ、そうした世界的事件の「現場」にいつも居あわせた人物で、そうした「現場」に居あわせること自体が彼の国際ジャーナリストとしての感覚の優秀さを物語っていると私は考えるのですが（そのわりには、彼の本はつまらなかった——とも正直に書いておきます）、さて、この彼は世界の大激動にかかわって次のようなことを言っていたの였습니다。まず、「今の時代は、専門家が事態を予測できない時代である。」² ついで、「専門家が予測したことはたいいていまちがつている。」

例として「ベルリンの壁」の崩壊を、彼はあげていました。その八九年の十一月の事態を世界の国際問題、ドイツ問題の専門家の誰が予測したのかというわけです。なるほど、八八年の秋には東ヨーロッパで続々と社会主義政権が打倒されるという大激動が起こっていた。かつての東ヨーロッパでも、

東ベルリン、ドレスデン、ライプチヒというような主要都市で何十万人規模の大デモ行進が起こっていたのですが、そうした事態が起こって来ていたときでも、なるほど、東ドイツの社会主義政権は打倒されるだろうと予測した人はいくらでもいた。しかし、その事態をひとつ大きく越えて、「ベルリンの壁」の崩壊まで見こした人はどれだけの数いたか——と彼は言うのです。たいていの専門家は、事態はそこまでは行かないという予測を下していました。そして、予測は完全にまちがっていました。

たしかに彼の言う通りだったと思います。実を言うと、私は八五年から八七年にかけて当時は「壁」に取り囲まれて文字通りの「陸の孤島」だった「西」ベルリンに住んでいました。私が「人生の同行者」と呼ぶつれあいを連れての滞在で、そのうち娘までが生まれてのくらしでありましたが（娘はそのときまさに「壁」のなかで生まれていたということになります）、そのときの私の実感は、「西」ベルリンの市民たちは、「壁」のなかの「陸の孤島」に住んでいるおかげで、きわめて国際情勢の変化に敏感な「専門家」にそれぞれがなっているというものでした。そのさまをさしてひとりひとりが「壁の専門家」になっていたと今ふり返って言えるような気がするのですが、八五年から八七年にかけて、その「壁の専門家」のなかでわずか二、三年先に「壁」が崩壊するなどという予測をした人はまずひとりもないかったのだないかと思えます。いや、それどころか、つい「壁」のむこうの東ベルリンで大デモ行進がくり返されるという騒ぎになっても、それら無数の「壁の専門家」たちのなかで、その大デモ行進については「壁」をも崩壊させると予測した人はいったい何人いたか。私は「壁」の崩壊のあと何人もの友人、知己に訊ねてみたのですが、みんな、それぞれにあれはまったくの不意打ちであつたと答えました。

いや、「壁の専門家」と言えば、「東」ベルリン市民に「西」ベルリンへの自由通行を許した当の東ドイツ政府の当局者ほど「壁の専門家」はいなかったはずですよ。「壁の専門家」ちゅうの「壁の専門家」であつたからこそ、そう自覚していたからこそ、彼は、その「壁」の崩壊につながる決定をしたのでしょうが、それが直接のキツカケとなつて起こつた「壁」の崩壊という次の事態は「壁の専門家」である彼の予測をはるかに越える大事態になつてしまいました。

この専門家が予測できず、また、専門家の予測あたらず、の話をつづけるなら、東ヨーロッパの激動が社会主義世界の崩壊、あるいは、旧ソビエトの消滅になり、「壁」の崩壊が冷戦構造の解体につながるというぐあいに、さらに大きなところで世界の激動をとらえた人が世界にいったい何人いたか、そこまで話は拡大します。いや、そんなことを言い出せば、「湾岸戦争」を誰が予測したか、さらには、日本での現在の「PKO後の日本」を予測したか——ということになつて来るのですが、そこまで行くと、もちろん、話は、さつき述べた「大正」時代の人たちにいったい十年先、二十年先の事態が読めていたのか、との私の痛切な思ひにいやおうなしにつながつて来ます。

そのうがつた、また辛辣なイギリスのジャーナリストの発言がそれ自体としてうがつてもいれば辛辣であつたのは、いや、結果的にそうなつてしまつたのは、そのシンポジウムで、聴衆から、「東西」ドイツの「統一」の可能性についての質問があつたからです。なみいる専門家たちのその質問に対する答は、もちろん「東西」ドイツはおそかれ早かれ「統一」するだろう、それはまちがいないことだが、ただ、今年中にはとても無理だろう、でした。しかし、現実の事態はそうした専門家たちの予想を大きく裏切る進展を見せて、その「今年中」に「統一」は成つていました。もつとも、その事態の

急激な進展は「統一」の主役の、その意味での「統一の専門家」であつたはずのコール氏の予測をも大きく越えたものであつた、そのことも予測をやまつた専門家の弁護のために言つておきましょう。

5

それでは、今、事態をみきわめて行くために何が必要か。どうすればよいのか。私も私なりに考えて来ました。その私の考えの結果をここでまず書いておきたいのですが、専門家の専門知識は、もちろん、必要です。専門知識がなければ、あるいは、それに基いた識見がなければ、何ごとを論じてみてもただの空理空論、あるいは、床屋政談のたぐいになる。問題は、今、世界の事態は、専門知識、専門識見だけでは対応しきれないところに来ているということでしょう。

私が専門知識、専門識見につけ加えて考えたいのは、まず、事態を大きな歴史的なひろがりのなかでとらえる展望——英語を使って言うなら「ヒストリカル・パースペクティブ歴史的展望」です。「PKO」の問題ひとつをとつてみても、それをただ「国連」とのからみあいやらそこでの「平和協力」やらの問題としてとらえないで、もっと大きな歴史的展望のなかでとらえる。もちろん、ここで大きく問題になるのは日本のアジア侵略の歴史ですが、問題はそれだけではありません。これはこれからおいおいこの本のなかで考えて行きたいことなのですが、そこにあきらかにふくまれている「市民社会の軍隊」という論理、倫理——すくなくとも、その論理、倫理をタテにとつての「国連軍」構想の推進ということになると、古代アテナイにまでさかのぼる「市民国家」の軍隊のありようのことにまで思いを至すことが必要になつて来ると私は考えるのです。そこまでの展望のひろがりあつての「歴史的展望」です。それがまず必要

です。

ついで必要なのは、今のがいわば人間活動のタテ軸に伸びて行く「展望」なら、同じ展望は展望でも、世界大に事態を見通して行くヨコ軸の「展望」です。これも英語を使つて言うなら、ワールド・バースペクティブ「世界的展望」とでも言うことになるでしょうか。「PKO」を考えると、東」「西」対

決の冷戦構造の解消後も残る「南北」構造のなかでことをとらえるのは必須不可欠のことでしょうし、環境問題は今やもちろん世界大にひろがる問題ですが、これも「南北」構造と結びつけて考えて行かないかぎり、見通しはつかない。

では、三つ目に必要なものは何か。私は想像力だと考えます。想像力の必要性については、私が「PKO」の問題を「大正」時代とのからみで論じたくだりでお判りかと思いますが、ここでの想像力は、ただの政治的想像力ではありません。もつと人間の活動の全般にわたつての想像力で（たとえば、私はさつき、「PKO」の未来——おそろべき未来に、今、「PKO」を決定した人たちの老いの問題にまで言及しました。人が老い、死ぬという人間の基本にかかわることまでをも想像する——そこまでのひろがりをもった想像力です）、あえて言うなら、「ヒューマン・イマジネーション人間的想像力」——それが、今世界の現在、未来にかかわつての見通しに求められているにちがいありません。

しかし、「歴史的展望」にしろ「世界的展望」にしろ、あるいは「人間的想像力」にしろ、かんじんなのは、その人のよつて立つ思想的土台です。かつてなら、確固な土台として考えられたものが、たとえば、マルクス主義でした。その土台に立つて、過去、現在、未来にわたつて世界の森羅万象を論じ上げるといふようなことを人はよくやっていました。しかし、今はその土台は大きくゆらいでい

ます。いや、崩れたと言ってもいいでしょう。では、自由主義の土台はどうか。こちらのほうも決してうまく行っていない。事態は、私の見るところ、そうしたこれまでに知られた何んとか主義というようなものを土台として考えるにはあまりに大きく動き出している。私には、今の世界のさまはそう見えます。ここで今土台として考えられるのは、人間が生きて行くことのなかで、これ以上のことをしたら、あるいは逆にこれ以下のこともしなかったら、人間は人間でなくなる、そうしたことが「人間」の「基本」^{ヒューマン・ファンダメンタルズ}（英語をも書いておくのは、この基本が複数形であることを示しておきたいからです。基本は人間が生きて行く現場で、それぞれにちがったものとして出て来ます。現場で、人間が人間であることを基本においてギリギリいっぱいの選択をする。そのギリギリいっぱいの選択が逆に基本を定めます）ということばで呼ぶなら、そうしたものでないかと思っています。

私がここで思い出すのは、一九九二年二月から三月にかけて東ヨーロッパを旅して歩いたときにチェコ・スロバキアのプラハで出会ったジャーナリストが口にした「コモン・センス」ということばです。「コモン・センス」と言っても、これは、もちろん、日本でよく誤解されているようなただのモノ知りの「常識」という意味を言いあらわすことばではありません。人間が人間として共通してもつ論理、倫理——まとめ上げて人間の「共通良識」と言えば、もつともこのことばの意味に近いことになるでしょうが、おそらく彼はそのとき私がさつきから言ってきた人間の土台としての「人間の基本」と同じことを言っていたのだと思います。彼は、なるほど社会主義はいいことをしようとしたかも知れない、実際にかなりしたかも知れない、しかし、あれは人間の「共通良識」としての「常識」に欠けていた。彼はそう言ったのですが、そのとき彼のそのことばで私が考えていたのは、社会主義

政治のことばかりではありませんでした。なんのかのと言つても、結局、金持が得をする、そのかた
ちで政治がかたちづくられる資本主義、自由主義のありようのことも考えていましたし、途方もない
環境破壊をともなつての経済発展のことも考えていました。そしてまた、もうひとつ、もうそのとき
にも社会主義政権の崩壊のあと、すでにかなりおぞましい姿を現わし始めていた、そして、そのあ
と、民族、あるいは民族主義の名の下でのではない殺戮、破壊、あるいは、暴行、強姦の展開にな
る民族の問題のことも考えていました。そこにどのような大義名分があろうと、正義が主張されよう
と、それが人間の基本を離れたものになるとき、もうそれは人間にとつて許しがたいものになる。そ
の「人間の基本」のことを私はチェコ・スロバキアのジャーナリストの「コモン・センス」というこ
とばにかかわつて考えていたのですが、この「人間の基本」としての、その意味での「常識」の重要
性は、今、さらにかんじんカナメのことになつて来ているようです。

6

おしまいにもうひとつ、世界の現在、未来を考えるにあたつて大事なことは、「明日」のことをど
う考えるか、ということだろうと思います。人類の行く末、地球の未来のことを考える、とまで大げ
さなことを言うつもりはありません。それよりは、もつと端的に自分たちの「明日」——市民運動の
集会に赤ん坊を抱いてやつて来ていたお母さん方のその赤ん坊の「明日」のことでもあれば、私の場
合で言うなら、私にさつき述べた難問を發した小さな娘の「明日」のことです。その「明日」が明る
い希望に満ちあふれた「明日」であるとは限りません。もうそうした「明日」を夢みるには、あまり

にも私たちの世界にはいろんなことがあった、ありすぎた——という感慨も私は正直言ってもつています。あるいは、明るい「明日」の幻想をもつことでまったく逆の体験をすることになった。私たちはその事例もあまた知っています。しかし、私は、やはり、「明日」のことを少しでも「今日よりよい明日」として、そうあるべきものとして、それを自分がめざして行くべきものとして考えて行きたいと思います。この「今日よりよい明日」という言い方は私の創案ではありません。何年かまえ——今から考えるとその時代もはるかに遠くに過ぎ去ってしまった感がありますが、ポーランドで「民主化」を求める「連帯」の運動が始まったとき、運動の中心人物のワレサ氏が、いったいあなた方は何を求めているのだとアメリカ合州国だったかの新聞記者に訊ねられたときに口にした答のことばがたしかそうしたものでありました。気のきいた言い方としておぼえているではありません。たしかにそうとしか言いようのないものとして、彼らのそのときのギリギリいっぱいの気持はあったと思います。私も、今、そうした気持をもっています。

この「今日よりよい明日」は、ただもう漠然とした夢としての「明日」ではありません。もう一歩踏み込んだかたちで自分なりに具体的にその「明日」のかたちを構想することあつての「今日よりよい明日」です。ただ、私の考える、この「明日」はあくまで「今日」につづくものとしてある「明日」であつて、「今日」と切れたかたちではるか彼方の「ユートピア」にある「明日」ではありません。この「明日」は自分が今生きている「今日」の現実と無関係に存在しているのではない。あくまでその現実につながってもいれば、その現実のなかにまき込まれて生きている自分のありようとも結びついていますが、それでいながら、その「明日」は「今日」と同じ「明日」ではない、「今日よりよい

なぜ、この本を書くか・小さな娘の問い

明日」であつて欲しい。私自身にとつても私の小さな娘にとつても。その望みあつてのこの本です。

I 「戦後」とは何か・その指標、基本

1 「三極構造」崩壊後の「一極構造」の世界

1

本論に入ります。

まず、ここでとらえておきたいのは、今、日本が位置し、私たちがそこで生きている世界が現在どのようなかたちのものとしてあるか、ということ です。それを的確にとらえておかないと、ことは大きくあやまります。これは、もちろん、「PKO後の日本」にじかにかかわって来る問題です。

ふり返って考えてみます。旧ソビエトの「ペレストロイカ」に始まった世界の大激動は、次のいくつかの事態を、世界にもたらして来ました。そして事態は、おたがいつながりあい、また、ぶつかりあつて、さまざまに問題、矛盾をひき起こしている。それが世界の現状です。かつてブッシュ氏は湾岸戦争にさいして、「新世界秩序の確立」をうたい上げましたが、これに対して、ニュージーランドの首相だったデイビッド・ラング氏が「新世界秩序についてもつともあきらかなことは、そんなものはないということだ」とあるアメリカ合州国の新聞の「アメリカはどこへ行くか」という特集記事のなかで（「ニューズ・デイ」92・10・25）発言していたことが私の記憶に残っています。

新しい事態の第一は、今さらあらためて書くまでもないことですが、「東西」対決の戦後の世

界構造が解体したことです。この解体が人類にとつてはかり知れないほど重大な意味をもつのは、これによつて世界が核戦争による破滅から免がれ得たことだけではありません。もうひとつ、これによつて軍事的対決、衝突によつてではなく平和的な手段で問題、矛盾を解決して行こうとする非軍事、非暴力的方向に戦後はじめて世界が全体としてむいたことでした。私は、これはほんとうに大きなことだった、いや、今も大きなことだと考えます。日本の問題にかかわつて言つても、この事態は、はじめて、日本が憲法第九条を現実の場で世界的に生かし得る土台をもつたことを意味していました。いや、今ももっている、ふたたび現在形で念を押しておきましょう。

しかし、たしかに「東西」対決の冷戦構造は解体しましたが、もうひとつの戦後の世界構造——富める「北」の世界が貧しい「南」の世界に対して優位に立つて、支配、収奪、差別をつづけるというここ何百年にもわたつての圧倒的不均衡、不平等の「南北」構造はいぜんとして変らずつづいています。いや、いぜんとしてどころか、「東」の旧ソビエトと東ヨーロッパという「先進国」部分が「北」の世界に加わることによつて、また、「南」の世界がそれまでそうした「東」の「先進国」部分から受けていた経済的、政治的支えを失なうことによつて、それはかえつて強化されて来ているというのが、今日の事態のあからさまな姿でしょう。事態のこうした姿かたちをもつとも明瞭に示したのが、そこにどのような理由があり、大義名分がかかげられていたとしても、アメリカ合州国が中心となつて「北」の世界が連合してイラクというまぎれもない「南」の世界の一国に立ちむかうという湾岸戦争の布陣でしたが、もちろん、もうそのときには、旧ソビエトも東ヨーロッパも陰に陽に布陣に加わっていました。そして、その戦争でのアメリカ合州国軍の勝利のあと、「新世界秩序」の確立の名の下、事態

はさらに激しく強化されて来ています。

ここでまたぞろ顔を出して来たのが、理由、大義名分はどうあろうと、ある場合には、武力行使もやむなし、という論理、倫理です。そして、いったん、この論理、倫理が確立すると、その「ある場合」の数は容易に増やされて行くであろうし、その無数にあるかも知れない「ある場合」にそなえて、やはり、軍備は必要だ、いや、強化されつづけなければならないということになる。まさに正義は力なり、です。正義は力によつてのみ、護られ、実現できる。「湾岸戦争」以来、またぞろのさばり出したのはこの論理、倫理ですが、その論理、倫理はまぎれもなく「PKO」協力法の成立の背後にありましたし、今、「PKO後の日本」にあつて大きく姿を現して来ています。

私は、さつき、「東西」対決の冷戦構造の解体が世界を、軍事的解決、衝突を避けて問題、矛盾を平和的に解決する方向に向けた、そのことによつて、非軍事、非暴力の方向にむけたと書きました。もちろん、まだ世界は、大きく言つてその方向にむいていると言えらると思います。しかし、今、事態はそうした期待に十分にこたえきれないものにもなりつつあるというのもまぎれもない事実です。第一、「東西」対決の冷戦構造の決定的な象徴であつた「ベルリンの壁」の崩壊がなされたとき、日本のなかで、これが日本国憲法の世界大にわたつての実現の機会であると夢想した人は多くいても、よもや、それからわずか数年のうちに日本国憲法の実現どころか自衛隊の「海外派兵」を可能にする、それによつて憲法を完全に「バイパス」するかたちで自衛隊を「合法」化する事態が起こり、自衛隊「違憲」の立場を長年つづけて来た社会党までが自衛隊の存在を「合憲」とする事態に至るとはそれこそまったく夢にも考えられなかつたことであつたにちがいありません。

2

「東西」対決の冷戦構造の解体とともに、その原因としても結果としても起こったのは「社会主義世界」の崩壊でした。また中国はいぜんとして自己のありようを「社会主義国」として規定しているようですが、これがもはや「社会主義国」と言えるのは共産党の一国独裁という政治のかたちだけだといふものになって来てしまっているのは事実ですし、「北朝鮮」（朝鮮民主主義人民共和国）にしてもキューバにしても、あるいはベトナムにしても、それがはたして「社会主義国」としてもちこたえられるかどうかは大いに疑問です。

「社会主義世界」の崩壊は、もうひとつ、重大な事態の変化を世界にもたらして来ています。それは、「社会主義世界」によって理念的にも現実の力関係においても大いに支えられて来た「第三世界」が崩壊して来ていることです。これは今さき述べたばかりの「南北」構造の強化にじかにつながって行くことですが、結果として、「北」の世界を形成して来た「自由主義世界」と「社会主義世界」、「第三世界」、この三つの世界によって成り立って来た戦後世界の「三極構造」が崩壊して、今や、世界は「北」の「自由主義世界」が完全に主導権をもつ「一極構造」の世界になって来ています。これまでの世界は「三極構造」をかたちづくりながら三つドモエのかたちで対立、衝突、妥協、協力しながらそれに安定を維持して来たのですが、この「一極構造」の世界はその安定を失なって来てしまっています。これまでの「三極構造」の安定のなかで押さえ込まれていた問題、矛盾が今各地で噴出して来ているのですが、そのもつとも激しいものがこれまで「社会主義」が安定、押さえ込みの傘としてあったか

つての「社会主義国」でのたいへんな暴力状況をともなった「民族紛争」でしょう。いや、そのあるものは、すでに「紛争」どころか戦争の様相を呈して来ている。ここでもまた、世界は非軍事、非暴力の方向とまったく逆の方向に動く動因をもちます。

この「北」の世界の主導権の下にある「一極構造」がもつ問題は他にいくつもあります。地球大にひろがる環境問題がそのひとつの大きな実例ですが、ここでも忘れてならないのは、さつきから述べて来た「南北」構造の問題です。環境の問題が「南北」構造の問題と大きくからみあつて存在する問題としてあることをここであらためて言っておきたいのは、このところはやりの「地球にやさしい×会社」のたぐいの企業がらみの環境問題キャンペーンなどがまったく考慮の外にしているのがこのからみあいであるからです。

くり返して書いておきますが、「南北」構造は解消されつつあるところではない、それは強化されて来ています。この事態のなかで、「南」の世界はかつてそこに強力にあった、すくなくともあろうとつとめて来た「第三世界」としての理念と現実の力を失なつて、今やまったく力のない、そして、理念も欠いた、あえて言えば、ただの貧乏人の集団になりつつあるように見えます。そして、「南」の世界がただの貧乏人の集団になつて来ただけ、私たちの「北」の世界がそれだけただの金持になつて来つつある。私には、今日の事態はまさにそんなふうに読みとれるのですが、このただの金持、理念はたいしてないが、経済力という金の力にしろ、政治力、そして、その背後にまぎれもなくある軍事力にしろ、力は大きくもっているし、今まさにそれは強力になりつつある。こうした事態に、今大きく力をさらに加えるものとして、「PKO後の日本」が出現して来たと言わなくてはならないでしょう。

3

そして、もうひとつ、さらに事態を複雑にもしているのは、「一極構造」の世界の主導権をにぎる「北」の世界の現状がこれまたたいへんなことになっていることです。「社会主義世界」の崩壊即資本主義の勝利、「自由主義世界」の勝利とする無邪気な主張は今後もうすっかり色あせて来て、たとえそういう主張を声高におらび上げてみたところで、山積する自分たちの問題を解決したことはならないというのが現在の大方の声のようです。こうした無邪気な主張がもつとも激しかったのは、言うまでもなくアメリカ合州国においてのことですが、今、アメリカ合州国内の経済、社会の問題はもうそうした主張をするにはあまりにも惨たる状態を示しています。今はもうアメリカ合州国は「第三世界」の政治、経済に介入、干渉しているときではない、「第三世界」はまさにアメリカ合州国内部にある。アメリカ合州国のすべきことはまず国内の問題を処理することだと、巨大な対外債務、貧困の増大、教育水準の低下、麻薬、^{エイズ} AIDS など、「第三世界」の問題がそのままアメリカ合州国内部の問題であることを指摘して、さつき私のもとニュージールランド首相の発言を引用したアメリカ合州国の新聞の同じ特集記事、「アメリカはどこへ行くか」のなかで説いていたのは、フランス大使を務めたことのあるメキシコの作家カルロス・フーエンテス氏でした。九二年秋の大統領選挙で、「変^{チェ}化^{ンジ}」をうたい文句として出馬した民主党のビル・クリントン氏がジョージ・ブッシュ氏を破って当選したのも、この事態のまさに反映でしょう。もうニッチもサッチも行かないところに追いつめられている——その大方の気持あつてのクリントン氏の勝利でした。

私は九二年秋から九四年夏までアメリカ合州国に二年近く滞在しました。ニューヨークの郊外ロング・アイランドにあるニューヨーク州立大学ストーニー・ブルック校に「客員教授」として教えるための滞在だったのですが、おかげでその大方の気持が無名の地方政治家のクリントン氏を大統領の座に押し上げた大統領選のさまを私は「現場」で見ることができました。「現場」で見ることができたと云つても、私は何もクリントン氏やブッシュ氏やらの選挙遊説についてまわっていたわけではない。ただ、選挙というもの、それが何んであれ、主役はあくまで候補者に対して票を投じる市民たちであるのが大きなことでしょう。そう考えれば、市民たちが自分たちの態度を決めるに至るふだんのくらしと、そこでの判断確立が、もつともきめ手になる「現場」であるにちがいありません。その意味で、私はすくなくとも日本でただ新聞やらテレビジョンやらの報道を通じてことの次第を知っているよりはるかに「現場」で見ていたと言つてよいかと思ひます。

さて、その「現場」での判断は、人びとが何んらかの「変化」^{チェンジ}を待ち望んでいるということでありました。「変化」待望の対象は必ずしもクリントン氏だけではありませんでした。長年の共和党、民主党の政治はどちらも駄目だとした大金持のペロー氏も出馬していて相応の人氣を博していたのも、「変化」待望の人びとの気持のあらわれでしたでしょうが、やはり、大勢を決めたのは、何んと言つても、アメリカ合州国という資本主義大国中の資本主義大国の問題、矛盾の噴出に直撃された社会の下積みの層の人たちでなかったかと思ひます。それはまず近年になかったほどの高い投票率にあらわれていた事態ですが、もうこれではやって行けないという思ひは多くの人の氣持をまず誰よりも、より恵まれない人たちの立場を理解している、いや、そのはずのクリントン氏に向けた、と言えるにち

がいありません。ブッシュ氏の劣勢を決定したのは、三回行なわれた大統領候補のテレビジョンでの公開討論会の二回目での、黒人女性が発した「自分で借金もしてない人に巨大な対外債務の問題が判るか」という質問に対応しきれなかったことだと言う人がいましたが、三回通して公開討論会を見た私にもそれはまったく納得できる意見でした。ジャーナリストたちが手慣れたかたちで質問するのに答えるというかたちの他の二回にくらべて、黒人市民の多いアトランタでのその二回目の公開討論会は市民が直接参加して質問するという、より「草の根」市民の「現場」に近いものでした。そこでの市民たちの質問は手なれていないだけにトンチンカンな感じのするものも多かったようでしたが、それだけにかえて「現場」の人びとの気持ちを感じさせたのも事実です。そのひとつが黒人女性のその質問でしたが、ブッシュ氏にとって致命的だったのは、質問としてはうまく訊ねられたものでなかったのは事実ですが、人びとの気持ちが滲み出たその質問の意味が判らずに訊ね返したことでした。テレビジョンを見ていた人びとの気持ちにそくして言えば、もしブッシュ氏が彼ら同様借金を抱えている人であつたら、すぐ質問が判ったはずだというわけです。ブッシュ氏がとちつたあと、ペロー氏はなんとかつじつまのあうような答をしていましたが、この大金持候補の答は決して大方の市民の共感を得るものではありませんでした。その点で自分が知事をして来たアーカンス州という貧しい小さな州での体験を踏まえてもつともソツのない答をしたのはクリントン氏でした。べつにかくべつすぐれた答をしたとは思われませんでした。とにかく他の二人よりはましであつたことは事実ですし、ブッシュ氏もつともぶざまであつたことは「現場」を考えるとときさらに重要な事実であつたと思います。こうした「現場」の空気をさらに激しいかたちで出した光景を私は選挙前日のテレビジョンの画面

で見ました。それは選挙前日の全国各地の表情という感じの番組でしたが、なかに黒人の地域の運動の指導者らしい人物が出て来て、彼は挑みかかるような表情で、ブッシュ氏が再選されれば、彼は自分たちを「殺す^{キル}」と言っていました。その「殺す^{キル}」という直截簡明な激しい一語が彼のその表情とともに私の記憶にあざやかに残っています。黒人をふくめて世の恵まれない人の「変化」を望む気持がクリントン氏を大統領の座につけたことは、選挙後の結果の分析が明瞭に示していたことでした。「ニューズウィーク」(十一・十二月選挙特集号)が示した数字によると、クリントン氏に投票した黒人の数は黒人の全投票者のなかで八二パーセントに達しているのに対して、白人の場合は白人全体の三九パーセントで、これは白人のブッシュ氏支持の四一パーセントにくらべて低い数字です。これほど直截簡明な対比を示していることではありませんが、それでも勤労女性のクリントン氏支持が四六パーセント、ブッシュ氏支持が三六パーセント、母子家庭の場合などの「ひとり親^{シングル・ペアレント}」のクリントン氏支持が五〇パーセント、ブッシュ氏支持が二九パーセントだったという事実もここでの事態を端的に物語っています。まとめ上げていえば、問題、矛盾の噴出が、クリントン氏を大統領の座につけたということです。これは言い方をかえて言えば、彼が今まさに問題、矛盾にまっとうからむきあっていることです。はたして、彼にその解決ができるか。できなければ、アメリカ合州国はどうなるか。いや、アメリカ合州国が今かつてよりもさらに大きく中心の位置を占める世界全体はどうなるか。正念場が来ているのは彼だけではありません。彼がひきい始めたアメリカ合州国にとっても、ひいては世界全体にとっても、それはどうやら来ているようです。

4

問題が山積しているのは、アメリカ合衆国だけではありません。世界のどこもかしこもが問題、矛盾を抱えていて、さきゆきまことにさだかでない。日本の金まみれの政治は今やヤクザの関与、さらにその背後にある「右翼」の関与までもう誰の眼にもかくしようのないものになって来ていますし、さしもの経済の繁栄も「バブル経済」の崩壊後、不況のまっただなかにあつて、出口は見えて来ていない。そして、これまで曲りなりにもその金まみれ政治の批判勢力としてやって来た社会党は、今やかつてのその金まみれ政治の主役たちと同じ政治的立場をとりつつあります。そして、同じ世界経済の優等生だったドイツも、かつての東ドイツを「吸収」して「統一」したあと、社会主義国の問題、矛盾をそのまま抱え込んでしまったかたちで経済は苦しいところに来ているし、その苦しさはそのまま民族差別に根をおいた「ネオ・ナチ」台頭に結びついて、未来の事態は予断を許しません。しかし、これは何もドイツだけのことでありません。社会主義政治の崩壊後、かつてのソビエト、東ヨーロッパの経済はどん底に落ち込み、社会は荒廃しきつています。これなら昔のほうがよかったというのは今やその地域でふつうにもなつて来ている声ですが、かつての「西」側に今それを救う力があるのか。これは大いに疑問です。かえつて「東」の窮状に押されて、ヨーロッパ全体が排他的、差別的な「ヨーロッパ中心主義」におちいりつつあるように見えます。あっちこつちに「ネオ・ナチ」的な動きは急速にひろまつて来ています。「社会主義」という政治の「統一原理」を失なつて、旧ソビエト、旧ユーゴスラビアのような多民族国家は崩壊して、「民族」の名の下にはてしない抗争が始まり、かつての

同国民どうしが血みどろのたたかいを演じるというのは、かつてのユーゴスラビアの場合が極端な例だとしても、もう今の世界にはざらにある事態になって来ています。そして、こうした事態の進展をとどめるのに必要なものは今やより強力な軍事力の行使しかない——とあつて、結局、その強力な軍事力をもつ、アメリカ合衆国を中心とする「北」の諸国が正義をふりかざして事態に介入する。しかしそれは同時に「北」の「南」支配を土台にした世界構造のいつその強化をもたらすことになる。いや、そもそもがそれをはじめから企図したものでありさえする。こうした状況のなかでもくろまれてゐる「新世界秩序」がどうしたものかは想像がつくというのですが、日本——「PKO後の日本」は今、確実にその「新世界秩序」のなかにし、かゝるべき位置を占めようとしています。そのし、かゝるべき位置がこれからどのような意味をもつか、あるいは、それがどのようにおそるべきものになるか——ことはまださだかではありません。

まとめ上げて三つの問題があると思います。ひとつは、このままでいったい世界はもつか。もうひとつは、そのなかで、日本はどうなるか。二つ目の問題は必然的に第三の問題に結びつきます。日本は、いや、日本の社会に生きる私たちは今何をどうすればいいのか。

この三つの問題を考えるにあたって、「戦後」——第二次大戦後の「戦後の世界」の意味をあらためてとらえてみたいと思います。

つづきは製品版でお読みください。